

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372601148		
法人名	医療法人 永田会		
事業所名	グループホームげんきの家 あんず		
所在地	熊本県菊池郡菊陽町辛川1923-1		
自己評価作成日	令和3年10月18日	評価結果市町村受理日	令和4年2月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年11月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「家庭的な雰囲気のあるげんきの家」「一人一人がその人らしい生活を送れるげんきの家」「自然環境を楽しめるげんきの家」を理念に、ご家族様との関係性を大切に、住み慣れた家で暮らしているような安心感と家庭的な対応を心がけています。ご利用者様同士の関係性に配慮を行い、楽しく過ごす時間やゆとりと過ごせる時間を大切に支援しています。ホームの周りには花や野菜を植え、収穫や食事作りを行っています。同法人は医療機関でもあり、緊急時には早急に対応を行い常に連携を図っています。職員は、個人年間目標を明確にし、達成できるよう努力と自己学習に励み、介護スキルアップとサービスの質の向上に努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体病院の裏手に建つホームは、入居者の入替えや職員体制の変更等の過渡期とともに、年齢的・介護的な幅も見られ、和やかな生活の支援とともに入居者の変化を見逃さず個別ケアを徹底することに注視している。四季折々の樹木(梅やあんず、柿等)や菜園での野菜等収穫と食卓に上る喜びは「自然環境を楽しめるげんきの家」、コロナ禍で外出がままならない状況に、その人らしい生活の支援は難しいが、「散歩は気持ちが良い」とする思いに「キロウオーキング等」その人らしい生活を送れるげんきの家」とする理念の実践に向け真摯に取り組んでいる。法人全体での在宅会議や身体拘束廃止委員会、栄養委員会や管理栄養士による勉強会等スケールメリットが生かされ、ホームとしての目標達成に全職員が一致協力して臨むホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念と年間目標を意識できるように玄関や事務所に提示し周知を図っている。新たにパンフレットを作成し理念を明記している。	さくらユニットの休止、入居者の入れ替り、職員体制等の変革期にあるが、理念に掲げる「その人の生活」をサポートするのが職員であり、ホームであると捉え、ミーティングの中で、『らしい』をどう思うかと投げかけながらケアに反映させている。コロナ禍にあってはらしい生活の支援は困難ではあるが、入居者の変化を把握し、個別ケアに注視している。年間目標も全員での振り返りと次年度につなぐとして全員で検討する体制としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在、コロナ禍の状況にあり地域との交流は自粛している。以前は地域行事に参加していた。	これまでは地域の行事等に参加し交流していたが、現在は外出や交流を控えている。職員としては、運営推進会議で地域の状況を把握し廃品回収に協力している。	外出が制限された状況に、入居者の中には散歩に出かけると気持ちが良い等の声が挙がっており、コロナ感染症の収束により、これまでの地域との関係が再開されることと期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症に対する支援方法や理解の勉強会を行い、また自己研鑽に励むことを目標にしている。見学や問い合わせ時、支援方法や対応を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在、書面にて運営推進会議を開催し、活動報告や入居者状況・サービス内容を送付し意見照会を行っている。委員会メンバーやご家族様からの意見をサービス向上に努めている。	行政と相談し、開催が出来ない場合は、書面審議として返信封筒を入れて地域の情報や意見等を収集する体制とし、近況報告、活動、事故報告での内容から対策まで詳細に報告している。面会禁止時の方法等運営推進会議の意見や提案をサービスに反映させている。	開始時間は18時からとして充実したメンバー構成である。時には時間を変更し、ホーム内を見て頂くことで入居者の生活の様子等を知る機会に繋がると思われ、検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に現状を報告し質疑応答や相談を行いケアに反映出来るように努めている。事故報告や相談等を行い協力関係を築けるよう行っている。	運営推進会議の開催に向けた相談、資料持ち届け時の情報交換や、コロナ感染対策等緊密な連携を図り、ワクチン接種(年齢的な問題)の相談など協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する勉強会を行っている。日頃からの言動が身体拘束にならないか職員間で話し合ったり振り返りを行っている。	隣接の病院全体での身体拘束廃止委員会の中での研修会参加や、新規入職者には認知症ケアや身体拘束の弊害等を教育している。職員の言葉遣いに気になることはその都度指導し、自己点検シートにより職員個々の状況を把握し、課題を洗い出し精査する体制としている。食事時には車椅子から椅子に移乗する等意識を高くして支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての勉強会を開いている。職員へ周知を図っている。日頃からのケアの中で虐待に繋がっていないか話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、制度を使用している入居者はいないが、制度について勉強会や話し合いをもうける必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に、必ず見学を行い、重要事項を説明し疑問や不安なことがあれば、きちんと説明している。また、改定の際も書面にて説明し同意を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置し意見や要望を聞けるようにしている。ご家族の訪問時に、日常の様子を説明しながら意見や要望を聞き取りしている。出された意見等は職員間で情報共有している。	家族にはコロナ禍になり“げんき便り”とともに写真の個別発送による情報発信に努め、これまでは家族会及び運営推進会議を問題提起の場としていたが、家族会の開催は見込めず、運営推進会議の資料を郵送し意見等を収集している。また、家族の訪問時等に聞き取りする他、連絡を緊密にしながら家族の心配される思いに対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員とのコミュニケーションを図り、定期的にカンファレンスを行い、意見交換や要望を聞く機会を設けている。その時に改善すべきことはその都度話し合いを行い改善に努めている。	管理者は現場に入りながら職員とのコミュニケーションに努め、毎月のカンファレンスや問題発生時等職員の意見等を出す機会が多く、意思疎通の良い環境が作られている。法人での在宅会議にも参加し、全員が情報を共有している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的な昇給もあり、個々の努力や勤務状況・実績等に対してやりがいにつなげられるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の年間目標に対して、研修や学びたいという気持ちを大切にしている。外部研修や法人内研修に参加し情報の共有ができるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス事業所との交流に関して情報交換や研修会を通して質の向上に繋げている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	契約前から面談や情報収集に努め、家族から不安や要望等を聞き入れ、早急に対応し信頼関係の構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	信頼関係を築くことを第一に、家族や本人の意向や生活状況の把握、不安な点を聞き関係作りを行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族からの思いや意向を尊重したケアプランを作成し生活に安心してもらえるように柔軟に対応出来るように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な環境の中で個性や生活歴を大切にし、個々の状況を把握、職員で情報の共有を行う。日頃からも意見交換しケアの振り返りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人や家族との関係性を大切に、常に状況報告し関係が保ちながら支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は、面会が難しいが家族の訪問時に窓越し面会や電話でのやり取りを行っている。家族には個々の写真や広報誌で近況報告を行い関係が切れないよう努めている。また必要な物品は持ってきていたでいる。	これまでであればボランティアや行事へ参加しながら地域住民と交流する機会もあったが、コロナ禍で家族との窓越し面会やタブレットを活用しながら関わりを継続している。ホームからの情報の提供、手紙・電話(兄弟や友人等)により関係性が保たれている。	新型コロナ感染対策の徹底により、家族中心である事は致し方のない状況にある。コロナの収束にあたり、これまでの取り組みを継続されることを望みたい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士での関係性の見極めを行い、テーブルの配置や気の合う仲間との時間を大切にしている。孤立しないように職員も仲介に入り支援している。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も相談や要望があれば、出来る範囲で対応できることを伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の思いや意向を日頃からの表情やしぐさから把握しその人らしい暮らしができるよう努めている。また希望に応じて趣味や家事の提供を行い心身の状況に配慮しながら行っている。	職員は入居者への日々の関わり・寄り添いに努め、直接の申し出が少ない中で、「〇〇をしたい」等をプランニングに反映させている。意思を表示されることが難しく、不安そうな顔色を見ては声を掛け、表情やしぐさ等により推察し、ケアに直結させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からの聞き取りは、関係者等から情報収集を行い職員に周知している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の心身状態や日々の変化を職員間で情報共有し個人記録に記入し現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	心身の状態や日々の観察を行い、カンファレンスを行っている。アセスメントを行い本人や家族の意向を確認し介護計画書を作成している。変化があった場合はすぐに対応できるよう努めている。	入居者・家族の意向をもとに、3ヶ月毎のモニタリングや半年毎に見直し、誤嚥をしない為の検討等個々の状況により新たにプランを作成している。実施状況には入居者の声を記し、課題として検討する等職員の観察結果や気づきが活かされた個別的なプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に日々の様子や変化を記載している。変化に対して申し送りノートや業務日誌を活用し職員間で情報共有を行いながら介護計画書の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在は家族との外出は控えてもらっているが、本人の要望に合わせた買い物や訪問理美容を行っている。頻度としては少ないが個々の希望に沿ったサービス提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事などの把握に努め、現在の参加は出来ていないが安全で豊かな暮らしをしていただければというように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の意向に応じてかかりつけ医との関係を築いている。母体病院で定期的な受診を行い、夜間や休日な場合も対応し適切な医療を受けられるように支援している。	入居時に希望される医療機関を聞き取りし、現在は全員が母体医療機関での受診を支援している。また、専門分野については家族の受診対応としている。同敷地内に母体医療機関がある事は、緊急時等の面からも家族や職員にとっても安心に繋がっている。歯科については訪問による診療や、週1回歯科衛生士によるチェックと職員も研修するなど、口腔ケアの面からも入居者の健康を支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職を配置し健康管理、相談・助言を行っている。医療連携加算に伴い母体病院の看護師へ報告・相談を行い適切な受診や看護を受けられるよう対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は、安心して治療ができるように、面会を行い家族や病院関係者と情報交換を行い関係作りに取り組んでいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化の指針について、入所契約時にご家族の意向を伺い、利用中や開始の際に意向が変わっても柔軟に対応できるように努めている。	入居時に重度化・終末期に関するホームの取組を伝えながら家族の希望を確認している。最終は医療機関での対応を望まれる家族が殆どのである。職員は日々入居者の健康状態に配慮しながら、病状などに応じて医師を含め家族と今後の方向性などについて話し合い、現在、特別養護老人ホームへの申し込みをされている方もおられる。	入居者や家族の希望があれば看取りケアに取り組みたいとして、研修会を実施する意向もあり、主治医の協力を得ながら、出来得る最良の支援に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や感染症・事故発生時対応などの勉強会を行っている。夜間発生時は医療機関との連携が取れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防署の立ち合いにより利用者にも参加してもらい行っていたが、現在は年2回の立ち合いはせず、実際に警報機を作動し消防署へ繋げている。また実施報告書を提出している。	法人と連携を図りながら通報訓練を年2回と、毎月防災訓練を実施し、昼間の避難誘導には病院と連携を図っている、自然災害は昨年度の水害資料をもとにした勉強会の実施、及び備蓄はリストを作成し確保している。	今後もコンセプトの埃など細かな安全チェックに期待したい。また、コロナ収束後は運営推進会議メンバーも一緒に昼間の訓練を実施したいとの意向も有り、実現に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自尊心を傷つけないよう、声かけやプライバシーの確保に努めている。排泄や入浴時に環境の動線の配慮を行っている。	入居者への言葉づかいや対応についてチェックリストにより振り返り、呼称は苗字にさん付けを基本とし対応している。管理者は職員の関わり方などで、気になる事があればその都度指導している。個人情報や守秘義務について、入職時や研修会の中で周知徹底に努めている。このことは玄関に置かれた面会簿の工夫に表われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話や表情から意向を汲み取り、本人の意思で自己決定できるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日常生活の会話から本人の思いに寄り添い、傾聴し希望に沿った支援を心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個性を大切にし本人の好む洋服を選択、訪問理美容でのカットの仕方を本人へ尋ねながら身だしなみやおしゃれができるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	朝食と毎食の炊飯をホームで行い、個々の食事形態で対応している。ホームの菜園で収穫した野菜を使い誕生会や行事の時は入居者の好みを献立にしている。食材の下準備やお盆拭きなども一緒に行っている。	献立は法人のものを使用しているが、菜園で収穫した野菜もホーム独自の一品として活用している。朝食と毎食のご飯をホームで炊き、副食などは法人で調理されており、野菜作りや梅の収穫からジュース作りなど出来る事で食への関わりを支援している。また、週1回の手作りおやつでは季節を楽しめるものが用意されている。時にはファミレスやハンバーガー店のテイクアウトも取り入れており、事前に好みのドリンクを尋ねるなど目先を変えた支援に喜ばれている。	管理栄養士による勉強会や栄養委員会に参加し、入居者の楽しみと健康を支える食事支援が行われている。今後も食事時に気づいたことや検食者の意見を活かし、楽しみとなるよう継続されることが期待される。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量は個人記録へ記載している。毎月管理栄養士に個々の栄養ケアや朝食の献立について助言や指導を受けている。体調や入居者の状態に応じて対応行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、個々に応じて一部介助や声かけを行っている。訪問歯科衛生士より指導を受け、口腔トラブル時は対応してもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立した方の見守りと介助が必要な方の排泄パターンを把握を行い個々に応じた排泄援助を行っている。変化時は、排泄チェック表へ記載しカンファレンスを行い支援している。	自立の方の継続と、介助が必要な方には排泄パターンを把握し支援している。自分が行きたい時に行ける事が大切であるなど、職員間で共有し、個別支援に取り組んでいることは記録から確認された。夜間もトイレやポータブルトイレの使用など個々に応じて支援しており、ポータブルトイレは掃除や日光干しにより清潔に管理している。排泄用品はホームで準備しているが、家族による持ち込みもあり、管理者は状況を伝える機会にもなっているとしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事に食物繊維、乳製品を取り水分補給や運動による便秘予防に取り組んでいる。また排便状況を把握し主治医の指示のもと下剤調整を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回～4回の入浴を行っている。入居者の心身の状態に合わせて支援し、拒否された方には、声かけやタイミングを工夫している。季節に応じてよもぎや菖蒲湯なども楽しんでいただければよい対応している。	浴室は換気や掃除を徹底し、週3～4回午前・午後で支援している。湯はその都度入れ替え一番風呂気分を味わってもらっている。可能な限り湯船に浸かってもらえるよう、2名介助や踏み台の使用も個々に応じて高さを変更している。季節の菖蒲湯に加え、庭先で摘んだヨモギを干しパックに入れた薬草風呂もホームならではの取組である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はホールで過ごしているが、個々の希望時や起床時間等に合わせて午睡を行っている。就寝の際には、室温や電気・寝具調整を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々が服用されている薬名は、個人ファイルに綴じ、内服変更時は、業務日誌や申し送りノートへ記載し情報共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴からの情報を共有を行い、本人の嗜好や家事の役割を活かし、その方に合った支援ができるよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在、コロナ禍により外出支援はできていないがホームの畑や草木を楽しんでいただいている。今後、ご家族や地域の方にも協力していただき支援を行っていきたい。	自然に恵まれた環境を活かし、菜園作業、入浴で使うヨモギ摘みや敷地内でのどんどこや、職員とのゴミ出しなど出来得る支援に努めている。家族や地域の協力を得た外出支援に早く取り組みたいとの意向も有り、コロナ収束後に備えていただきたい。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、コロナ禍により買い物などはできていないが、以前は外出時の買い物はご自分でしていただけるよう支援していた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の取次ぎも行い、本人からの手紙や電話の希望時は対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有の空間で室温や換気に注意し、ソファを置きゆっくりと過ごしていただけるよう支援している。ホールには毎月、季節に応じた壁画を木入居者、職員で創作し壁画を飾っている。	四季を目や耳で感じながら過ごせる環境の中、毎月入居者も一緒に取り組んだ作品で壁面が飾られている。日中は食事を含めリビングで過ごされる方が殆どであり、適切な室温や換気、席の配置も相性を考慮している。塗り絵などの作業時も、童謡のCDを流すなど雰囲気を壊さないようにしている。テレビも昨今は入居者の不安になるようなものが多く、十分配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルで思い思いに過ごしていただけるよう配慮している。入居者同士での談話やテレビ鑑賞など、その状況にあわせ工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた物を使用してもらい、また写真や作品を飾り安心して過ごしていただけるよう工夫している。	ホームを紹介した冊子には、一室の写真と全室暖かい日差しが差し込み、十分な広さで落ち着いた空間であることを紹介し、使い慣れた品々の持ち込みについて説明している。また、病院からの入居であれば管理者が訪問し、本人の状況確認、家族からの聞き取りを行い居室の環境作りを行っている。布団敷きで生活されていた方に当初は同様に支援していたが、ADLの低下によりベッドへの変更や家族が準備された転倒防止マットの使用等、状況に応じて検討している。	コロナ収束後は家族にホームや居室をゆっくり見てもらう機会を設け、引き続き居心地のよい環境作りを一緒に進めていかれる事を期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室には表札を貼り、共有空間では一人一人が物のあり場所がわかるように工夫している。本人ができること、手伝いが必要とすることを把握し自立した生活が送れるように支援している。		